

一九七七年以前出土の木簡(三)

奈良・平城宮跡(第二次)

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六四年(昭39)十一月～一九六五年三月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所
- 4 調査担当者 榎本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙遺跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第二次調査は、推定第二次内裏外郭の東に接する部分で行った。発掘面積は六三〇〇m²におよぶ。調査地区は、内裏外郭の東面築地回廊の東から、関野貞『平城京及大内裏考』以来平城宮跡の東限と考えられていた地点までのところにあたる。検出した遺構は、内裏外郭をめぐる築地SA七〇五及びその東側で北から南に流れる玉石組の溝SD二七〇〇と、それによって東西に区分される

掘立柱建物群とである。築地SA七〇五以西の建物群は内裏外郭内にあって、内裏の運営に密接な関係を有する官衙に所属するものと思われ、SD二七〇〇以东の建物は、それとは異なる官衙に属するものと考えられる。これらの遺構のうち木簡が出土したのはSD二七〇〇とこれにそぐ凝灰岩石積みの溝SD二〇〇〇とである。

SD二七〇〇は全長三五mにわたって検出し、縁幅二・六m、深さ一・五mの規模をもち、側壁は径三〇cm内外の玉石を七段に積みあげている。この溝は一九二八年と一九三二年に、奈良県技師岸熊吉氏が二一次発掘区の北方で検出した溝につながり、宮城東部における基幹の排水溝である。岸熊吉氏は二ヶ年、両度にわたってこの溝を四ヶ所検出し、いずれも玉石組の護岸施設をもつものであることを確認している。出土した遺物は瓦、土器の他、木製下駄、櫛、漆塗曲物、和同開珎、神功開宝、万年通宝、帯金具、鏡破片及び墨書土器で、墨書土器のうち判読できるものは「内掃」「膳」「□内省」「省」「□」「三」の他、「此椀私家／持往人之□／宮」と記したものである。また一九八一年春には奈良国立文化財研究所が、この溝の

北延長部分を検出した(第二九次調査)。

第二二次調査でSD二七〇〇から出土した木簡は総数二九〇点であるが、これらの木簡は図2にみられるように、溝の各層にわたって出土している。溝内の埋土はおおづかみには六層にわけられ、第II層を除いて、すべての層から木簡が出土している。各層から出土した木簡にみえる紀年銘の年代順位は溝内の土層の上下の順位と一致し、出土した年紀のある木簡によって、ほぼその堆積の絶対年代を推定することができた。この溝の最下層(第VI層)からは天平初年の年紀のある木簡が出土し、この溝の埋土の堆積の始まる時期を示している。また溝全体をおおう最上層からは延暦の年紀のある木簡が出土し、この溝の最終の埋没年代を示している。したがって、SD二七〇〇は古くは天平初年頃から漸次年代をおって堆積がすすみ、延暦年間に全体が埋没したものと考えられる。もちろん、SD

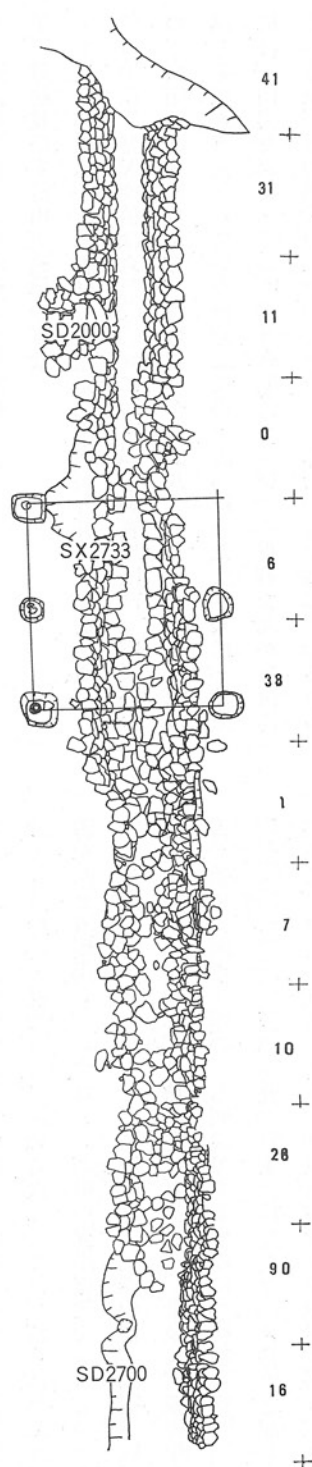


図1 SD2700 木簡出土状況図
(数字は3mごとの点数)

二七〇〇はかなり長い溝であるから、溝の他の地点では異った堆積が予想される。

木簡に伴出した遺物としては、和同開珎、万年通宝、神功開宝、施釉陶器、陶硯、土馬、木製容器、檜扇、箸などがあり、墨書土器としては「宮内天長節」「斎会」「犬母比人」「少允」「宮」「庁」「膳」〔宮カ〕
〔内省〕「□大炊」等の記載のあるものがある。

SD二〇〇〇は、内裏内郭からはじまってSD二七〇〇にそそぐ溝で、内裏内郭をかぎる築地回廊を暗渠でくぐりぬけ、次第に深さを増して、築地SA七〇五のところでは再び暗渠となっている。SA七〇五をくぐるところでは深さ一・三mとなり、側面は下部を凝灰岩の切石積とし、その上にさらに大きな玉石を積みたしている。この溝からは、SD二七〇〇に注ぎこむところで木簡二点が出土している。

SD-200溝

(1) \cdot
 $\left[\begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right] \begin{array}{l} \\ \\ \\ \\ \text{倉} \\ \text{七} \\ \text{カ} \end{array}$
 \times

(繪) (74)×(18)×3 081 111 一六号

SD二七〇溝

(1)・「民部省召
波多足□山□
賛土師佐美万呂

多祢 七〇〇〇 〔月力〕〔日力〕 宮内 111×24×5 011 二〇九四号

(2) $(206) \times (23) \times 7,081$ 110九五号

(3) ×宮内×

(4) 木工寮解『☐』申請☐×

『木工寮□□□』
(115)×49×5 019 一〇九七号

(5) 岡田王 三三王 (191)×(8)×3 081 1101号

(6)                     

豎子所六人奴 荒
□當 逃亡六人 婢奴三人 栗男 益万呂

飯運一人 眞木 子石 □万呂女

(7)・「解請
宮内省 請 宮内
宮内省省省省□×

水司  (228)×34×50 19 二〇九六号

(8) 官春祭五日 後宮祭六日 (115)×(15)×17 081 二一〇五号

169 二二七四号

(10) 公案力 ×

・「延暦二年八月^{〔月九〕}□^{〔月九〕} (65)×32×7 061 二一九号

(11) 婦宣飯炊 ☐ ×

(112) × (22) × 2 019 111 111号

(12) 「丹波國何鹿郡高津郷交易小麥五斗」

(13) 「阿波國那賀郡中男海藻六斤 和射」

242×25×5 031 111 八三号

人成

益力
万呂
今
治
毛力
返力

」 (700)×44×7 011 二〇九九号

(14) 「讚岐國」^{〔那珂郡カ〕} 調塩一斗 (173)×(17)×9 019 二一八五号

(15) 「美作國勝田郡塩湯郷米五斗」 183×(16)×4 082 二一八六号

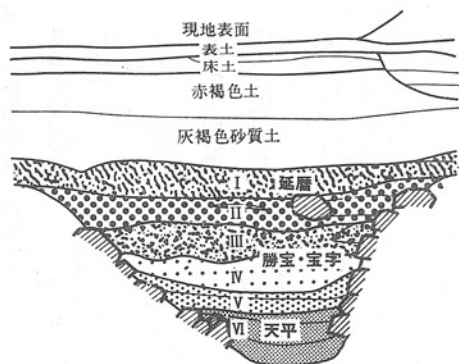


図2 SD 2700北壁土層図

以上SD二七〇〇出土の木簡の内容として注目されることは、宮内省、木工寮、采女司など宮内省に關係する記載があること、また典膳、後宮祭、水司など後宮に關係する記載があることなどが注目される。前者については、墨書土器に「□内省」と記されているものがあること、また岸熊吉氏の調査で「内掃」、「□内省」と記されたものがあつてそれぞれ内掃部司や宮内省を示しているものであることと一致している。このような木簡の記載内容の特徴は、内裏の東北に接する官衙の性格を示唆しているかもしれない。

9 關係文献

横山浩一
工業普通
「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」(『奈良国立文化財研究所年報一九六五』) 一九六五年

田中 琢
「昭和39年度平城宮調査出土の木簡」(同右)

奈良国立文化財研究所
「平城宮跡昭和39年発掘調査概報」 一九六五年

同
「平城宮木簡二」 一九七四・五年

同
「平城宮跡出土木簡概報(三)」 一九六五年

岸 熊吉
「平城宮遺構及遺物の調査報告」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十二冊』) 一九三四年

同
「第二回平城宮遺構遺物調査報告」(同右第十三冊) 一九三五年

(鬼頭清明)

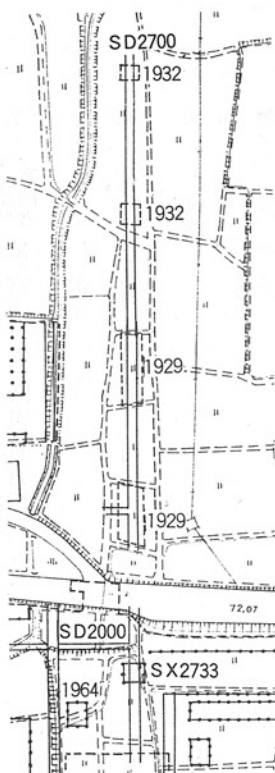


図3 SD 2700概念図